

# 「テラコッタ彫刻 in 湘北短期大学図書館」個展開催を通して — 個展における造形教育の関わりと可能性 —

大塚 習平<sup>a</sup>

<sup>a</sup>湘北短期大学保育学科

## 【抄録】

本稿では筆者がライフワークとしている彫刻制作について、自己の作品を振返る機会を作ると同時に、学生や学校関係者が彫刻に触れる機会を作り出すという目的の為、学内展覧を試みた事についてまとめている。

本展覧会においてアンケート調査を実施した結果、鑑賞者の彫刻や素材（テラコッタ・木・鉄）への興味や関心が、鑑賞前よりも高まった事がわかった。

## 【キーワード】

テラコッタ 造形 彫刻 美術教育

筆者は、造形教育と制作活動が「ものを生み出す」という点で、密接な繋がりを持っていると考え、ライフワークとしてテラコッタによる彫刻制作を約20年間続けて来た。

本稿では、筆者が学内図書館での個展開催を通して、学生はじめ教職員、そして一般の方々に、彫刻を鑑賞する機会を作った事、自身のこれまでの彫刻制作の方向性について考える機会とした事についてまとめている。

また展覧会の際、アンケート調査を実施した結果、鑑賞者が図書館での展覧会を観て、彫刻作品への関心ならびに素材への関心を深め、今後の美術鑑賞へのきっかけとした事が明らかとなった。

## 1. はじめに

本学保育学科では毎年、幼稚園や保育園の教育現場に学生を輩出している。学生達は学業をはじめ、学校行事、サークル活動全ての事に対し、真摯な態度で取り組んでいるように見受けられる。ただ、多くの大学生に共通して見られる傾向に漏れず、本学学生も「美術」に対する関心や体験、鑑賞の機会に乏しい点が課題と考えられる。

「美術」について向き合う事は、「豊かな情操を養う」<sup>1)</sup>とされ、人生をより充実したものにするといわれている。筆者自身、教育現場において「芸術作品の魅力や創作の面白さについて学ばせたい、鑑賞の機会を与えたい、また豊かな情操を身につけた人材を育てたい」と考えてきた。特に立体造形物に関しては、平面作品に比べ、一般的にも目にする機会に乏しく、筆者の専門でもある「彫刻」というジャンルがある事さえ知らなかった学

---

<連絡先>

大塚 習平 otsuka@shohoku.ac.jp

生も見られた<sup>2)</sup>。

前述した通り、本学学生は将来、幼児教育に携わる学生であるから、「美術」を体験したり鑑賞したりする十分な時間を確保する事は難しい。そこで筆者は、学内で展覧会を開催する事により、少しでも学生が「美術」について興味・関心を持ってもらえるよう、筆者の専門であるテラコッタ彫刻による個展開催を試みる事とした。

## 2. 展示作品について

今回展示した作品に関する説明は以下の通り。

「残されたかたち」(図1) 材質はテラコッタ、金箔、石膏、木によるもの。大きさは、高さ1m60cm(台座含)、幅60cm、奥行60cmである。2009年に「湘北短期大学学内研究助成金」を得て、イタリアフィレンツェ 聖フィオレンティーナにある、テラガイア工房にて制作したもの。第65回記念 横浜美術協会展「協会賞」「はまぎん産業文化振興財団賞」を受賞した。

「雲の記憶 一道標」(図2) 材質はテラコッタ、木によるもの。大きさは高さ1m70cm、幅40cm、奥行40cmである。2011年に第67回横浜美術協会展に出品し、「教育委員会賞」を受賞した。困難な状況でも挫けず、前向きな姿勢を忘れないようにしたいという思いを形に込めた。木彫による台座兼背景が、まるで道標のように自立したので、サブタイトルを「道標」とした。

「環 一冬」(図3) 材質はテラコッタ、鉄、木である。大きさは高さ1m70cm、幅60cm、奥行き50cmである。1999年、第53回二紀展に出品。テラコッタで等身大のものを制作した最初の作品である。社団法人二紀会の全国公募展覧会「二紀展」に初出品した作品でもある。「環」シリーズとして「夏」と「秋」も制作している。

「風と雲と希望と」(図4) 材質はテラコッタ、木

による。大きさは高さ90cm、幅40cm、奥行30cmである。2011年、第6回横浜美術協会展 春季受賞者展に出品。人物はなるべくシンプルな形とし、吹いてくる風を髪と雲の動きで表した。背景には空に続いて行く階段を配し、上昇感を表した。

「双眸」(図5) 材質はテラコッタ、石膏、木によるもの。大きさは、高さ80cm、幅40cm、奥行き30cmである。2007年、神奈川二紀受賞作家展に出品。雪国でよく見られる人の姿を形にしてみた。寒さに耐えながら春の到来を待ち望み、静かに遠くを見据える人のかたち。

「雲の記憶」(図6) 材質はテラコッタ、石膏、木、金箔によるもの。大きさは、高さ1m80cm、幅60cm、奥行き60cmである。2010年、第66回横浜美術協会展に出品。「横浜美術協会賞」受賞した作品。現代に生きる我々と同様に古代の人が空を見上げ、生きていた姿を想像しながら制作した。テラコッタの「風化したような」テクスチャを生かした作品を生み出したいと考えている。

「雲の記憶 一祈人」(図7) 材質はテラコッタ、石膏、木、金箔によるもの。大きさは、高さ1m40cm、幅1m40cm、奥行き70cmである。2011年、第65回二紀展に出品。初めて制作した座像。彫刻を座らせる台座は、鑑賞者も座れるようにしてある。そのため作品は、受容的雰囲気を持ち、期せずして学内での記念撮影スポットとなったようだ。アンケート結果でも来場された多くの方々に気に入って頂けた作品。

「祈」(図8) 材質はテラコッタ、石膏である。胸像で大きさは、高さ70cm、幅50cm、奥行き40cmである。2004年、春季二紀選抜展に出品。窯の都合により、細かいパーツごとに焼き上げたテラコッタを、石膏によって繋ぎ合わせた作品。火入れにより、意図しなかった形(歪み)が生じたため、結果的に面白い全体像となった。

「想」(図9) 材質はテラコッタ、石膏である。胸

像で大きさは、高さ70cm、幅50cm、奥行き40cmである。2004年、春季二紀選抜展に出品。人物像と衣服を別々に制作し、焼き上げた後、繋ぎ合わせた。2つのパーツを組み合わせる事による立体感を強調するとともに、人物と衣服によるリアリティーを表現した。

「雲をかぞえる人」材質はテラコッタ、石膏、木である。大きさは、高さ2m、幅2m、奥行き1m50cmである。2009年、第63回二紀展に出品。等身大に木彫の背景を配した試行的作品。背景に雲を透かし彫りし、空間感や絵画的要素を盛り込み、物語性を感じさせるよう工夫した。

### 3. アンケート調査について

今回、大学図書館という場での個展開催にあたり、どのような方が足を運んでくれたのか、また図書館での展示についてどんな感想を持たれたのかを知るため、アンケート調査をおこなった。結果は以下の通りである。

鑑賞者の年代層は、10代が136名、20代が11名、30代が6名、40代が7名、60代が7名、70代が5名、80代以上が0名（計179名）であった。

性別は、男性が15名、女性が164名（計179名）であった。短期大学での開催という事もあり、女性が圧倒的に多かった。

鑑賞者の住む地域については、厚木市内が59名、厚木市以外が92名、県外が16名（計167名）であった。厚木市以外の内訳は多い順に、相模原市が29名、秦野市が16名、小田原市が13名、横浜市が9名、平塚市が9名、海老名市が8名、伊勢原市が5名、座間市が4名、藤沢市が4名、町田市が3名、愛川市が3名、寒川市が3名、湯河原市が2名、川崎市が2名、南足柄市が2名、大和市1名、山北市1名、茅ヶ崎市が1名、綾瀬市が1名、ノーコメント7名だった。同じく県外も多い順に並べてみ

ると、御殿場市4名、東京4名、沼津市2名、多摩市1名、狛江市1名、さいたま市1名、京都市1名という結果だった。

図書館での展覧会開催についてどう思うかについて質問したところ、「良い」が123名、「良くない」が2名、「分からない」またはノーコメントが51名（計179名）であった。「良い」の主な理由としては、①図書館の「アクセントになっている」「固い感じとの対比が良い」「中であって違和感なく設置されている」②作品を「身近に感じる事ができる」「近くでよく観る事ができる」「手で触る事ができる」「身近に観る事によって時間がかかっている事が分かった」「身近に観て惹き付けられた」③鑑賞者が「本やDVDも見ることが出来る」「作品がある事を意識できる」「作家の作品を一度に観ることが出来る」「作者の生活についてもイメージできる」「気軽に観る機会ができる」「学内見学もできて良い」「直接接することが出来る」「本の紹介ような解説を見る事ができて楽しい」「子どもと一緒に絵本を読む事もできた」という事が挙げられている。「良くない」の理由としては「狭いので設置する作品数を絞った方が良い」、「広い空間に置かれた方が作品が映える」という事であった。「わからない」は51名。

鑑賞者が年にどのくらい展覧会に訪れるのかについて、0回が131名、1回～2回は25名、3回～5回は9名、6回～10回は3名、それ以上は11名（計179名）であった。

厚木市には現在、美術館などの展覧会場が無いが、それについてどう思うか質問してみたところ、展覧会場が「欲しい」が23名、「あれば良い」が79名、「無くてもかまわない」が36名、「わからない」が41名だった。

展覧会で展示された作品に関し、「気に入った作品があるか」質問したところ、以下のような結果となった。多い順に「雲の記憶 一祈人」（図7）

72票、「双眸」(図5) 26票、残されたかたち」(図1) 20票、「風と雲と希望と」(図4) 20票、「雲をかぞえる人」(図10) 20票、「想」(図9) 20票、「残されたかたち」(図1) 20票、「環 一冬一」(図3) 14票、「雲の記憶」(図6) 8票であった。

#### 4. 考察

今回の展覧会開催は、大学図書館という異例な場での開催の試みだったが、これが鑑賞者に対し良く作用した点と悪く作用した点が浮き彫りとなったように思う。

まず、開催場所に関してであるが、学内であることから当然のごとく10代の女性が多かった。数は少ないが、幅広い年齢層が訪れてくれた事は意外だったと思う。また意外だった点として、厚木市以外から来場されている方が全体の65%と、半数を超えていた事がわかった。小田急沿線上に沿って来場者数が多い事もアンケートより伺えたが、必ずしも距離や利便性が来場要因の全てではないという事が考えられる。

次に鑑賞者に関してであるが、73%の方がこれまで展覧会を訪れていないというアンケート結果だった。これにより、本展覧会では普段展覧会に訪れないという人達に対し、作品鑑賞の機会を与える事ができたと考えられる。加えて、学内展鑑賞について「良い」という回答が全体の約70%であったことから、展覧会について好意的に捉え、興味・関心を持っていただけたようだ。しかしながら、「厚木市に美術館があれば良いか」という質問に対しては、179名中102名(57%)が「欲しい」または「あれば良い」としているが、残りの77名(43%)は「無くても構わない」または「わからない」としている。この事から、個人レベルで展覧会を開催する事については好意的で関心が高い事が伺われるが、市民全体として芸術を推進したり、施

設を主体的に利用したりする事については、関心が低い事がわかった。

今回の展覧会では、これまで制作してきた作品を、まとめて展示したが、これにより気がついた点について述べてみたい。テラコッタを扱い始めた当初は、モデルの魅力に引張られるように制作していたが、年を追うごとに形が単純化され、余計な凹凸が削り落とされてきているようだ。特に「残されたかたち」(図1)では、ほとんど円筒で人体が表現されている。「環 一冬一」(図3)と比較するとその違いは明確になると思う。

次に異なる素材との組み合わせによる表現が増えてきた事である。「双眸」(図5)のあたりから、人体をより際立たせるために背景を木で制作し始めた。これが次第に変化し、「風と雲と希望と」(図4)や「雲をかぞえる人」(図10)では、背景は単に人体を際立たせるための装置ではなくなってきた。さらに、背景自体に意味を持たせるようになり、人体との空間表現を試みたり、絵画的要素や物語的要素を加えたりする事となってきた。

今回の展覧会において一番好評を得たのは「雲の記憶 一祈人一」(図7)であった。座像を制作したのはこれが初めてである。立像と比較してみると、座像は背が低く親しみやすいという点と、椅子に腰掛け並んで座れるという受容的要素が、この作品の人気に繋がったのではないかと考えている。

今後の課題としては、形の捉え方が以前に比べ、単調になってきているように感じたので、もっとこだわる点はこだわり、コンセプトを明確にしていくべきだと思った。次回の展覧では、光と陰を強調し、立体としての強さを打ち出していきたいと思う。さらに、ご意見いただいたように、鑑賞のための空間に気を配り、作品と鑑賞者が良い時間を共有できるように、更なる研鑽を積んでいきたい。

## 5. さいごに

本展覧会開催におきましては、米澤健一郎理事長、宮下次衛学長はじめ大野恵美学科長、北川盈雄図書館長、そして藤澤みどり図書館情報サービス課長ならびに図書館スタッフの皆様にご理解とご協力を頂きました。特に、藤澤課長はじめ図書館スタッフの皆様には、作品解説キャプションまで制作して頂き、訪れた方々からは「親しみやすくわかりやすい」と大変好評でした。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。さらに、遠くよりお越し頂きました皆様、特にフィレンツェよりお越しいただいた、通訳の芹澤邦子様、アンケートにご協力いただきました皆様、叱咤激励いただきました皆様に、深く感謝申し上げます。

## 註

- 1) 文部科学省による学習指導要領（平成20年3月告示）第7節 図画工作「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わわせるようにするとともに、造形活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」としている。
- 2) 筆者が担当する授業「造形」において行ったアンケート調査によれば、美術に「彫刻」があることを知っていたのは、1学年130名中10名程度で、全体の1割に満たなかった。



1. 残されたかたち  
テラコッタ、石膏、木  
H160 W60 D60  
2009第65回記念横浜美術協会展



2. 雲の記憶 一道標一  
テラコッタ、石膏、木  
H170 W40 D40  
2011第67回横浜美術協会展



3. 環 一冬一  
テラコッタ、石膏、鉄、木  
H170 W60 D50  
1999第53回二紀展



4. 風と雲と希望と  
テラコッタ、木  
H90 W40 D30  
2011第6回横浜美術協会  
春季受賞者展



5. 双眸  
テラコッタ、石膏、木  
H80 W40 D30  
2007 神奈川二紀受賞作家展



6. 雲の記憶  
テラコッタ、石膏、木  
H180 W60 D60  
2010 第66回横浜美術協会展



7. 雲の記憶 一祈人—  
テラコッタ、石膏、木  
H140 W140 D70  
2011 第65回二紀展



8. 祈  
テラコッタ、石膏  
H70 W50 D40  
2004 春季二紀選抜展



9. 想  
テラコッタ、石膏  
H70 W50 D40  
2004第58回二紀展



10. 雲をかぞえる人  
テラコッタ、石膏、木  
H200 W200 D150  
2009第63回二紀展



The report of private exhibition  
“Sculpture made from terra cotta in Shohoku college library”.  
- A reflection on the relationship between art education and private exhibition -

Shuhei OTSUKA

**[abstract]**

I tried intramural exhibition about the sculpture work which the writer makes the lifeworks, the purpose of making on opportunity to improve and for school official and many people to appreciate sculpture.

The result of a questionnaire, it turned out that concern about sculpture and material increased.

**[key words]**

Terra cotta, plastic art, sculpture, education through art